



## 平和の響き —— 空表現の追求

水野 学 | MANABU MIZUNO

世界中の人に伝えたい「平和」への思いを青空に込めました。  
透き通るように透明で、淡いけれど深く、鮮やかだけれど優しい空を表現して、  
そこにたくさんのハトを羽ばたかせ、「PEACE」の文字を描き出しました。  
「平和」への思いが天高く、青空いっぱいに響き渡ります。

## ABOUT TRIAL

トライアルについて

### ●作品コンセプト

僕は問題を発見しそれを解決していくことが好きで、もしかしたらデザインよりそちらの方が好きかもしれないと思うことがあります。作家性の弱い頭の構造をしているというか（笑）、何か困っているのなら助けたいという気持ちがとても強いです。ですから、グラフィックトライアルでも「響」というテーマを通じて何か社会的なメッセージをコンセプトに置くことにしました。では、一番響いてほしいと思えるものは何なのか。音、経済、歌といろいろありますが、考えた結果、やはり「平和」が響くのが一番いいのではないかという結論にいたりました。

では、一番平和の象徴になるのは何でしょうか。地球というものは一つですが、「平和でない状態」とは、その地球を皆が何らかの要因によって切り取り、争っている状態のことだろうと考えました。ならば切り取られたものを一つにつなぎあわせていくことが「平和」に一番近づくのではないだろうか、地球上で一つであるものといえば、その代表的なものが「空」だと思ったのです。陸地は海で分断されているし、海は陸地しかない地域ではつながっていません。空だけが分断されずにすべての地域、すべての人に等しくつながっているものではないかと思えたので、「空」をモチーフに平和というコンセプトを表現することにしました。



### ●トライアルテーマ

これまで経験してきた中で、出ているようでいて、どうしても出ない色が青でした。例えばタレントさんの背景に広がる空や、カタログの1ページに象徴的に空を入れるときなど、いつもそう感じていたのです。これは僕が青という色が好きだから敏感に反応してしまうのか、僕以外の方々もそう思っているのかはちょっとわかりませんが、僕自身にとって青という色はとても表現しづらい色でした。中でもグラデーションが複雑に広がる空は表現が難しく、印刷ではくすんだり赤転びしたりするので、非常にデリケートなモチーフとして捉えていました。それを今後は一切そう思わないようにするために、今回の実験の一つとして設定することにしました。

もう一つやってみたかったことに「写真の再現性の限界」があります。フィルムとデジタルの違い、あるいはフィルムサイズの違いで調子の再現性がどのくらい変わってくるのか、予想はできるけれど実際に目にしたことはありませんでした。いつか自分の目で確かめてみたいと考えていたので、この機会に片村文人さんの協力を得て、叶えることにしました。

今回のトライアルはデザイナーや印刷業界の方だけでなく、カメラマンやカメラ業界、写真関連のあらゆる方々、学生の皆さんにとっても、大きな教材になるのではないかと自負しているのですが、いかがでしょうか。

※赤転び  
印刷インキは、乾く過程で色相や色の濃さが変わることがあり（ドライダウン）、想定した色よりも赤く仕上がった状態。



## 淡いけれど鮮やかで、透明感のある青空をつくりだす

「理想の空づくりのためのテストです。まずは鮮やかで透明感のある青空をどうやって再現するか。空の濁りを解消する方法と、鮮やかで透明な青色のつくり方を探しました。次に、青空の素材としてどんな原稿を使うと表現が豊かになるのかを検討しました。B1ポスターで、より豊かでリアルな青空を表現できる方法を探ります」

### 濁りのない青空を生む インキを探る

通常のCMYK4色では、空の色がどうしても濁ってしまう。製版で調整する方法もあるが、インキの選択をどうするかがやはり最大のポイントだ。そこで、インキを変えるだけでどれだけ発色や表現に差が生まれるか、同じ版を異なるインキの組み合わせで刷り比べてみた。

#### ●シアンのみを特色にして刷る



MYK版はプロセスインキで、C版のみ彩度の高い特色シアン「GIGA 353」で印刷。全色プロセスインキのものとは比べ、若干鮮やかになった。



C版のみGIGA 353      すべてプロセスインキ

#### ●MYKの色を加えた特色シアン4色で刷る



C版は「GIGA 353」、MYK版は「GIGA 353」にプロセスMYKをそれぞれ5%ずつ加えた特色シアン4色で印刷。彩度が増し、かつ深い青となった。MYKの混入濃度を上げると深みが増すが、爽やかさは減っていく。



MYKを各10%混入      MYKを各30%混入

#### ●シアン版のみで刷る



4色分解したシアン版のみを「GIGA 353」で刷ったもの。MYKは全体に薄く入っているだけなので刷らなくても成立し、濁りもなくなった。

## フィルムサイズの違い・フィルムとデジタルの違いを比較する

1030×3640mmというB1サイズ5連の大きさにまで引き延ばして使うことを前提に、写真の種類とサイズを変えることで、印刷における再現性を比較した。フィルムとデジタル、さらにサイズ(解像度)が違うものではほぼ同時・同場所で撮影した。フィルムは35mm、6×6、4×5、8×10の4サイズの計5種(6×6のみ2社のフィルムで撮影)、デジタルはサイズ違いの2種類の、合計7種類。フィルムは粒子や質感の差が出やすいネガフィルムを使用した。さらに別撮りしたハトを合成。空は特色シアン1色、ハトはプロセス4色で印刷した。



35mmや6×6では拡大率が適正よりも大きくなるため粒子の粗さが限界を超える。一方、デジタルは2種ともなめらかすぎてハトと合成すると不自然さが際立ってしまった。その中で、8×10は味わいになる程度の粒子感で、ハトの画像も馴染ませやすい。



フィルムカメラで撮影 (35mm/ネガフィルム)



フィルムカメラで撮影 (6×6/ネガフィルム : A社製)



フィルムカメラで撮影 (6×6/ネガフィルム : B社製)



フィルムカメラで撮影 (4×5/ネガフィルム)



フィルムカメラで撮影 (8×10/ネガフィルム)



デジタルカメラで撮影(サイズ : 652mm×488.6mm)



デジタルカメラで撮影(サイズ : 534.1mm×356.5mm)

GIGA 353  
T&K TOKA社の「原色藍」。

フィルムのサイズ  
35mm(サンジュウゴミリ) : 24×36mm  
6×6(ロクロク) : 56×56mm  
4×5(シノゴ) : 100×125mm  
8×10(エイトバイテン) : 200×250mm

# FINISH

全作品とディテール

MANABU MIZUNO GRAPHIC TRIAL 2014



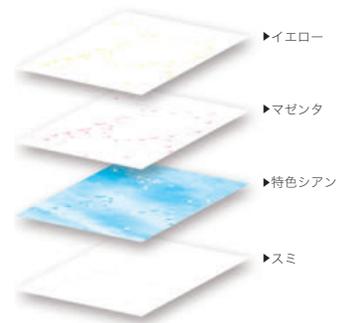
GRAPHIC TRIAL 2014 MANABU MIZUNO

## POINT & COMMENTARY

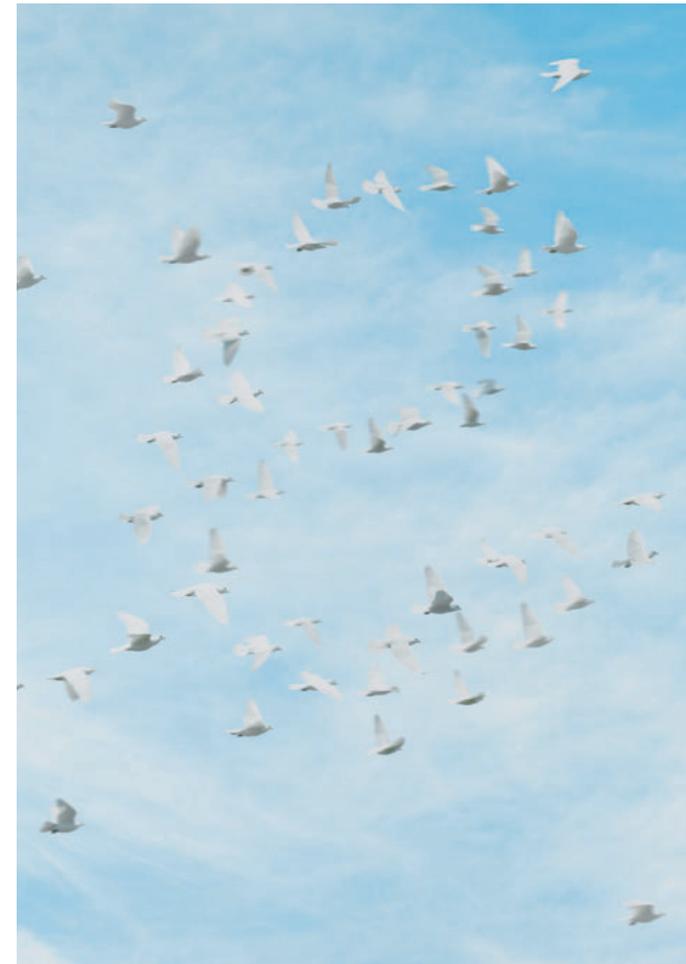
ポイントと解説



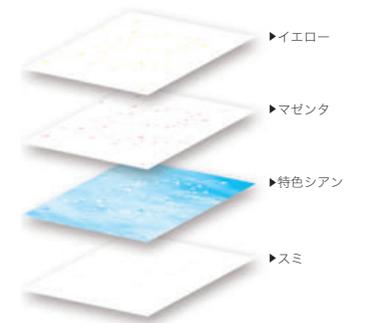
### 版構成



用紙：ヴァンナーボスムースF-FS  
(スノーホワイト)  
四六判 130kg  
版の構成：スミ→特色シアン→マゼンタ→  
イエロー



### 版構成



用紙：ヴァンナーボスムースF-FS  
(スノーホワイト)  
四六判 130kg  
版の構成：スミ→特色シアン→マゼンタ→  
イエロー

## EPISODE



### 青単色で印刷した空

「なにを表現したいかによって当然ながら選択は大きく変わってきます。今回の最大のポイントが“空”の特色1版刷りです。“淡いけれど深い”“鮮やかなのに優しい”という表現を求めた水野氏は、多色刷りによるボリューム感や深みよりも、彩度の高さとインキそのものの淡さが醸し出す透明感や抜け感を重要視していました。4色刷りの分色版を見てヒントを得た1色刷りという発想は、豊かな表現が必ずしも物質的な豊かさや比例するわけではないことを改めて教えてくれたように思います」(田中)

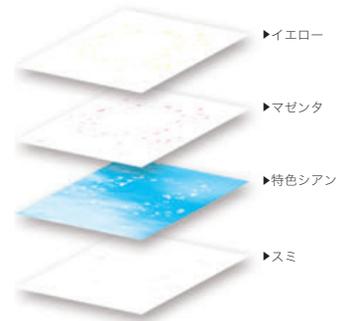


### カメラマンの片村文人さんについて

「今回の実験に協力してくれたのがカメラマンの片村文人さんです。僕は、デザイナーもカメラマンも伝統工芸の方も皆、装飾的な部分と機能的な部分の両輪でものを考えられるのが理想だと思うのですが、片村さんはその両方をきちんとクリアできる方だと思います。今回、協力をお願いしたところ快諾していただき、仕様の異なる7種類のカメラで撮影してくれました」(水野)  
片村文人 (片村文人写真事務所) / 1982年鳥取県生まれ。10BANスタジオ、瀧本幹也氏に師事。2009年に独立。2011年、APAアワード2011 広告作品部門特選受賞。



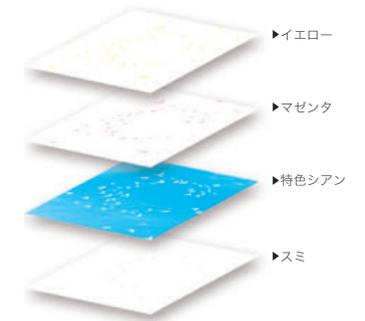
版構成



用紙：ヴァンヌーボスームスF-FS  
 (スノーホワイト)  
 四六判 130kg  
 版の構成：スミ→特色シアン→マゼンタ→  
 イエロー

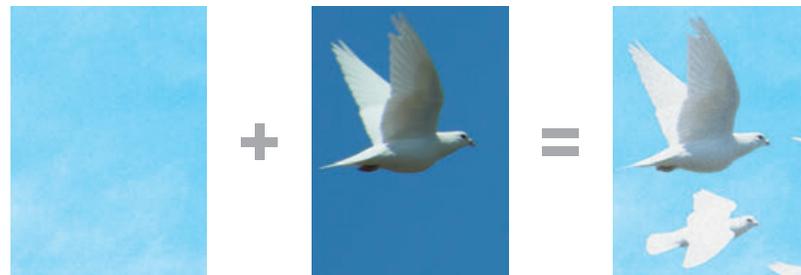


版構成

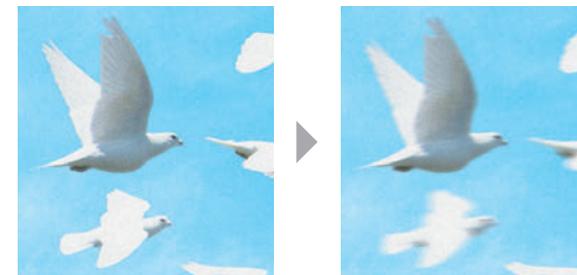


用紙：ヴァンヌーボスームスF-FS  
 (スノーホワイト)  
 四六判 130kg  
 版の構成：スミ→特色シアン→マゼンタ→  
 イエロー

EPISODE



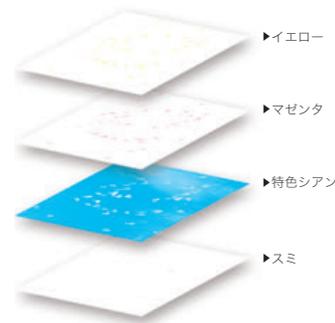
**ハトと空の合成①/なじみ**  
 デジタル撮影のハトと8×10  
 フィルムで撮影した空の一体  
 感を出すために、ハトの画像  
 を粗くして8×10の粒状性に  
 合わせ、さらにハトのシャド  
 ウ部のバランスを空の明度と  
 馴染ませた。



**ハトと空の合成②/立体感**  
 1ショットで撮ったような自然な感じを出すために、ハ  
 トの画像の一部に画像処理をしている。手法は「ボカシ  
 シ」と「ブレ」の2種類。ピントが甘く見える「ボカシ」  
 で画面全体の奥行きと立体感を出し、ハトの羽ばたきの  
 速度感を「ブレ」で表現して画面全体のリアル感を強め  
 た。



版構成



用紙：ヴァンヌーポスムースF-FS  
 (スノーホワイト)  
 四六判 130kg  
 版の構成：スミ→特色シアン→マゼンタ→  
 イエロー

EPISODE



印刷について思うこと

「昨今では印刷物は伝達ツールとして衰退すると言われることがあります。しかし、人間は未来への憧れと過去への愛着の二つを引っ張り合いながら進化していく動物です。僕の知り合いで“本屋さんに行くとその国の国民性がわかる”という人がいます。文民統制や焚書など、人の思考や知識をコントロールする時、印刷物は真っ先にターゲットになります。印刷はゲーテンベルクの時代から人類を限りなく豊かなものに導いていきました。今回“平和”をテーマに制作しましたが、ある意味において、平和は印刷から生まれると言っても過言ではない、僕はそう思います」(水野)

AFTER TRIAL

トライアルを終えて

●トライアルを終えて

今回は大きく分けて、三つのことにチャレンジしました。一つ目が「メッセージの伝達」です。できるだけ大きなテーマを設定し、その結果、より広く深く多くの人に伝わるビジュアルをプレゼンテーションできたように感じています。「平和」は、嘘でも偽善でもなく、その大小にも関わらず、誰も恒久の願いです。もちろん、このポスターでそれが実現するとは思いませんが、この平和への願いの「かけら」が誰かの目にとまり、小さな平和を生み出せたら幸いです。少しでも多くの平和がこの世に響きあってくれることを願っています。

二つ目が「空の色の再現性」です。僕は実家の部屋に中学生の頃から1枚の貼り紙をしているのですが、そこには「実はこうだった」というメッセージが書かれています。幼い頃から、問題を解決する能力よりも問題を発見する能力の方が大切なのではないかと考えていました。皆がなんとなくやり過ごしてしまっていることや何気ない出来事に対し、「これは本当にそうなのだろうか」と疑問を持ち、問題を発見することで、その結果、「実はこうだった」と思えるような事象を発見できることがいつしか僕の至福となっていました。

今回、4色でも4色+特色でもなく、特色1色のみで「空」を表現できたことは、まさに「実はこうだった」そのものでした。以前から自分の重しとなっていた空の印刷表現が、なんと1色の方がきれいだという驚愕の結末を迎えることになり、僕の人生のテーマも実現できた幸せな経験となりました。

三つ目が「カメラの特性」です。これは僕自身が客観的に見ても面白いと思えるものになりましたし、デザイナーだけでなくカメラマンの方も印刷会社の皆さんもとても興味深いものとなったのではないかと思います。35mmフィルムからデジタルまで7種類、再現性や粗さなどをこれだけ大きな紙でリアルな印刷として目の当たりにすることができたのは大きな収穫でした。まさに「驚きました」の一言に尽きるトライアルとなりました。

—— 水野 学

●プリンティングディレクターから

今回のトライアルはまさに実践に即したものとなりました。日頃から印刷でもややもやしていた部分を解決したい、という狙いが明確でしたので、今ある基準に則しながら今後に生かせる成果を出そうと考えました。

ですから手法はたいへんオーソドックスです。通常の製造方法をベースにしながらか、「空はこの表現でいいか」「35mmフィルムの最善の入力方法は？」と一つずつ見直し、糸口をつかんだらそこをグッと掘り下げます。たとえば、メーカーによってインキの発色にどのくらい違いがあるか、フィルムカメラとデジタルカメラでは再現性はどこまで変わってくるかなど、PDとして十分に理解していたつもりでも、まさに「百聞は一見に如かず」でした。僕自身にとっても驚くほどの収穫を得ることができたように思います。

今回は、水野さんの「これからのデザインを志す人のために」という思いに少しでも応えるために、共有できるデータづくりができる「厳密なディレクション」を目標に取り組みました。そのため、普段より細かく数値を管理し、微差を見逃さぬように努めながら全てのテストを行いました。また、最終の刷り上がりの色調誤差をなくすためにインキ濃度も細かく管理し、実践に即した印刷立会いをしているので、私自身にとっても実り多いトライアルになりました。

—— 田中 一也

